



Title	<解題>老いの変容 : 自己性、標準性、時間
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 94-100
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57569">https://hdl.handle.net/11094/57569</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 解題

本稿は、2015年3月25日、大阪大学待兼山会館会議室において開催された、サラ・ヘイナマー教授の公開講演“Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”のもとになった原稿を、本学院生の高原耕平さんと共訳したもので、この原稿の邦訳を本誌『臨床哲学』に掲載することについては、ご本人から快諾をいただいている。サラ・ヘイナマー教授は、現在、フィンランド・ユヴェスキュラ大学（社会科学・哲学部教授）とヘルシンキ大学（主観性・歴史性・共同性研究コミュニティ所長）を兼任している。2007～2014年の間、北欧現象学会の会長を務めたほか、多くの国際ジャーナルの編者や審査員を務め、多くの国際的な著者の論考を集めた論文集の編者を務め、多くの博士論文のスーパーバイザとして後継研究者を育ててきて、北欧現象学およびフェミニスト現象学の牽引役となっている女性研究者である。

彼女の体系的な研究は、人間の身体性、間主観性、時間性の本性を探求することに向けられており、文献的な研究は主に、フッサール、メルロ＝ポンティ、ボーヴォワールに向けられている。彼女の執筆活動は広く、現象学、実存主義、心の哲学、哲学史に及んでおり、その最も注目された重要な著作は、*Toward A Phenomenology of Sexual Difference* (Rowman and Littlefield 2003), *Phenomenologies of Mortality and Generativity* (Indiana University Press 2010), *New Perspectives on Aristotelianism and Its Critics* (Brill 2015), *Consciousness: From Perception to Reflection* (Springer 2008) などであるが、その他、フィンランド語・英語の300本を超える論文、数えきれないほどの口頭での発表により、全ヨーロッパからアメリカまでよく知られる存在になっている。現在は、人格性と世代発生性の著作に取り組んでいるという。

私が、彼女と初めて出会ったのは、私も委員を務めている日本現象学会が2007年より北欧現象学会との国際交流を始め、同11月の大会では北欧現象学会の会長（当時）ヘイナマー教授が来日し、「フッサールの革新と倫理学一個人主義的アプローチ」（飯野由美子訳、『現象学年報』24、2008年、所収）という発表を行った時であった。その時は、余り話す機会が持てなかったが、2009年4月には、私の方がタンペレ（フィンランド）で開催された北欧現象学会で発表“Narrative and Perspective”（「ナラティヴとパースペクティヴー〈かたり〉の虚と実をめぐって—」（木村敏・坂部恵監修『〈かたり〉と〈作り〉臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所、2009年、所収をもとにした英語版に加筆・修正

を行ったもの)を行った時に、少しお話をしたが、その時私の関心は「ケアの現象学」にあり、同学会のあと、スウェーデンにカーリン・ダールベリ教授(当時リネウス大学)がヴェクショーで主催する研究会「ケア学への現象学的アプローチ：生活世界ケア」を訪ねることに関心は向かっており、そういう関心をもった研究者がフィンランドにもいるかどうかをお尋ねするにとどまった。その後、私は、科研による共同研究「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」(2010～2012年度)および「北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明」(2013～2015年度)により、北欧ケアの問題に取り組んできた。

そんななか、2013年8月下旬にヘルシンキで一週間過ごす機会があり、その時ヘイナマー教授に連絡をとったところ、仕事の合間合間であったが、4日間お会いしていろいろと話をしたり、ヘルシンキ市内にあるホスピスを一緒に訪問してホスピス医にインタビューする機会を作ってくれたり、フェミニズム研究の小さな集まりに誘ってもらったりした。その際、私がこのところ「生老病死」の場面での「ケアの現象学」というテーマで考察を進めているという話をすると、ボーヴォワールの性の問題から出発して、出産、病い、老い、死という問題を人間存在のないしとして考えてきているヘイナマー教授と、それぞれ異なる関心から出発しながら、現在の関心を共有していることに互いに共感を覚えた。私自身は、その後、英国ミルトン・キーンズに飛んで、オープン大学で開催された国際学会 Death, Dying & Disposal に1週間参加したのだが、そこにヘルシンキのヘイナマー教授から追いかけるようにしてメールが舞い込んだ。ちょうど、日本・フィンランド両国の共同研究を募集しているので一緒に応募しないかというお誘いのメールだった。締切が迫っていて、両国の学術振興会に同時に申請しなければならないため、お互いに内容をメールで調整あいながら、私は上記の学会に参加しながら、その合間に申請書を書いて日本宛にメールで送った。しかし、共同研究の実績もまだほとんどないこともあり、残念ながら、それは不採択となった。

2014年3月には、スウェーデン・リンショーピン大学からリサ・フォークマーソン・シェル准教授が来日し、大阪大学でも「北欧のフェミニズム現象学」と題した研究会を行い、そこで二つの講演「位置づけられた身体をもつことと家(ホーム)がもつ意味——フェミニスト現象学の視点から」(高山佳子・浜渦辰二共訳『臨床哲学』vol.15-2、所収)と「単なる喪失ではない：加齢に伴う認知症における自己のあり方」(青木健太・浜渦辰二共訳『臨床哲学』vol.16、所収)をしていただいたが、シェル准教授もヘイナマー教授とは親しい

なかにある、フェミニスト現象学の中心的研究者の一人である。

さて、前述のように不採択通知を受け取ったが、せっかくヘイナマー教授との共同研究の話が盛り上がったのを何とか活かしていきたいと考え、再度学術振興会に申請するためにも共同研究の実績を積む必要があると考えて、2014年度の学内の海外研究者短期招聘のプログラムに申請して、採択された。それによって、今回ここに邦訳を掲載することになった公開講演が実現することになった。また、3月23日の公開講演の翌日から、「フェミニスト現象学」と「現象学の多様性」と題する二日間のオープンセミナーを行い、日本の若手の研究者達の発表をヘイナマー教授に聞いていただき、コメントをいただくことができた。また、東京の研究仲間たちのおかげで3月27日には、東京大学駒場キャンパスでも公開講義とワークショップ“Gender and Embodiment”を開催することができた。また、同年5月にはヘイナマー教授のもと、博士論文“Temporality of the Face-to-Face in Levinas’ Ethics”にて博士号を取得したイリーナ・ポルシェチェック博士（ヘルシンキ大学ポスドク研究員、リトアニア・ヴィルニウス・ヨーロッパ人文大学講師）を招聘し、公開セミナー「フェミニスト現象学に関する研究」を開催した。

# PROF. SARA HEINÄMÄA



## WELCOME TO JAPAN

Prof. Sara Heinämäa is the philosopher who specializes in... Phenomenology, Theory of Body, Gender, Woman's study, Feminism, Sexual difference, Pregnancy, Birth, Aging, Death, Intersubjectivity, Psychoanalysis... / Husserl, Merleau-Ponty, Beauvoir, Butler, Kristeva, Irigaray...

All papers are presented in English. Please don't hesitate to contact us if you have any further questions.

**3.23 mon. 14:00-17:00 Public Lecture**  
"Aging and death:  
A phenomenological-philosophical approach"

**3.24 tue. 13:00-17:00 Open Seminar**  
"Feminist Phenomenology"

**3.25 wed. 13:00-17:00 Open Seminar**  
"Multiple Faces of Phenomenology"

★ In the conference room at the Machikaneyama-Hall  
★ Contact : minae@let.osaka-u.ac.jp (Inahara)

Organised by the Ethics & Clinical Philosophy Lab.  
and Graduate School of Letters, Osaka Univ.

## Program

**3.23 : Public Lecture — Sara Heinämäa**  
"Aging and Death: A Phenomenological-philosophical Approach"

**3.24 : Open Seminar "Feminist Phenomenology"**  
13:00~13:10 Opening Speech by Shinji HAMAUZU (Chairman)  
13:10~13:40 Haruka TSUTSUI (Tokyo Univ.)  
Biological Essentialism as a Narrative: Thinking from Popular (Neuro)science on Sex/Gender Differences  
13:40~14:10 Hitomi SAITOH (Nihon Univ.)  
Woman's Body and Surrogacy in Japan  
14:10~14:20 [Short Break]  
14:20~14:50 Takashi IKEDA (Meiji Univ.)  
The Personal is Phenomenological is Political: The Case of DARC Women's House  
14:50~15:20 Yuka MIYAZAWA (Osaka Univ.)  
Pregnancy, Life, and Phenomenology  
15:20~15:30 [Short Break]  
15:30~16:00 Keiko TAKAYAMA (Osaka Univ.)  
A Paradigm Shift in Gilligan's Ethic of Care: From Natural Science Perspective to Life World Perspective  
16:00~16:30 Yui KATSURA-NOGUCHI (Osaka Univ.)  
What is a Mother? A Phenomenological Exploration of Motherhood  
16:30~17:00 Minae INAHARA (Osaka Univ.)  
Exploring the Lived World of Mothers Who Have Children with Disability: A Feminist Phenomenological Approach  
17:00~17:10 [Short Break]  
17:10~18:00 Discussion

**3.25 : Open Seminar "Multiple Faces of Phenomenology"**  
13:00~13:10 Opening Speech by Shinji HAMAUZU (Chairman)  
13:10~13:40 Yuta KOMURA (Tokyo Univ.)  
The Problem of Sexuality in Japanese Manga Culture  
13:40~14:10 Kazuki FUJITAKA (Osaka Univ.)  
On Butler's Debt to Phenomenology  
14:10~14:20 [Short Break]  
14:20~14:50 Yukako SHINOZUKA (Osaka Univ.)  
The Value of Phenomenological Description in Psychiatry: An Overview and Further Investigation  
14:50~15:20 Kenta AKI (Osaka Univ.)  
Mood and Talking  
15:20~15:30 [Short Break]  
15:30~16:00 Hwayoung KIM (Osaka Univ.)  
When the Living Critique Starts: Disorder and Assumption  
16:00~16:30 Tadashi KAWASAKI (Osaka Univ.)  
A Description of a Beard: Toward a Phenomenology of the Vegetative  
16:30~17:00 Michael Gillan PECKITT (Osaka Univ.)  
Gare and Beauvoir on Physical Disability  
17:00~17:10 [Short Break]  
17:10~18:00 Discussion

さらに、9月にはこちらからヘルシンキ大学を訪ねて、ヘイナマー教授がオーガナイズしてくれた学際的ワークショップ「対話と間主観性」にて、同教授の同僚で、いままでは「オープンダイアログ」の第一人者として日本でも有名になったヤーコ・セイックラ教授の基調講演「身体をもった活動としての精神療法」の後に、私も基調講演「フッサール現象学と精神医学における対話」を行う機会を与えていただいた（本誌所収拙稿「精神障害をもつ人々を地域で支える取り組み——沖縄訪問研修報告のまえがき——」参照）。日本からは、稲原美苗助教と大学院生の川崎唯史さんも参加、ともに発表の機会を得て、ヘルシンキ大学およびユヴェスキュラ大学と大阪大学との交流にもなり、これからの共同研究にも弾みとなった。また、翌日には、同じくヘイナマー教授のオーガナイズにより、ヘルシンキ大学哲学研究室のセミナーにて講演“Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir’s The Coming of Age”（本誌所収）をする機会を与えられた。これは、ヘイナマー教授の本論文“Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”が、ボーヴォワール『古い』を論じたのに対するリプライとして、私なりにボーヴォワール『古い』についての考察を行ったものである。

**Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium**  
**"Phenomenology of Vulnerability and limits"** 1-3 March 2016  
 Osaka University, Toyonaka Campus

**3/1 (Tue), 13:00-17:00**  
 13:00-13:15: Shinji HAMAUZU: Introduction to Phenomenology of Vulnerability and Limits  
 13:15-14:20: Sara HEINÄMAA: Mortality and Death: Limit Experiences and Phenomenological Analysis  
 14:30-15:20: Kenta AOKI: Death in the Everydayness  
 15:30-16:30: Michael Gillan PECKITT: Heidegger's Notion of Solitude as an Anticipatory Response to Levinas  
 16:30-17:00: Discussion

**3/2 (Wed), 10:00-18:00**  
 10:00-11:00: Petra NYMAN-SALONEN: Embodied Mutual Regulation in the Psychotherapeutic Setting  
 11:10-12:10: Tetsuo SAWADA: Phantasy and Vulnerability in Children's Drawing: Starting from Merleau-Ponty's Sorbonne Lectures 1949-1952  
 12:10-13:10: Lunch Break  
 13:10-14:00: Mao NAKA: Reproduction and Vulnerability  
 14:10-15:10: Hitomi NAKAZAWA: Phenomenology of "Feminine" Body Experience  
 15:20-16:20: Kazuki FUJITAKA: Assuming Paradoxes: Rethinking Identity and Vulnerability through Butler and Beauvoir  
 16:30-17:30: Irina POLESHCHUK: The Power of Caring: Erotic Love as a Ground for Ethical Relation (M. Henry and E. Levinas)  
 17:30-18:00: Discussion

**3/3 (Thu), 10:00-18:00**  
 10:00-11:00: Takashi IKEDA: Phenomenology of Posture: A Perspective on Being Human as Vulnerable Being  
 11:10-12:00: Tadashi KAWASAKI: Phenomenology of Vegetal Corporeality  
 12:00-13:00: Lunch Break  
 13:00-14:00: Shojiro KOTEGAWA: Phenomenology of Fatigue  
 14:10-15:10: Jussi SAARINEN: What Kinds of Limits Do Existential Feelings Place on Our Experience?  
 15:20-16:20: Haruka TSUTSUI: Agency and Vulnerability  
 16:30-17:30: Erika RUONAKOSKI: Outside the Limits of Empathy? Emotional Contagion and Doing Things Together  
 17:30-18:00: Discussion

Illustrated by Aju  
 Organized by the Department of Clinical Philosophy, Graduate School of Letters, Osaka University

また、今年度は、学内の国際シンポジウム開催の支援に申請をして、採択され、3月1～3日に、フィンランドからヘイナマー教授と若手の研究者4名とを招聘して、国内からも若手研究者7名を招き、阪大の院生3人も加わって、豊中キャンパスで日本フィンランド共同研究・国際シンポジウム「傷つきやすさと限界の現象学」を開催した。これがきっかけとなって、もっと発展して、日本・フィンランド・スウェーデンの共同研究になっていくことを期待している。

以下、ヘイナマー教授の膨大にある論文のなかから、本稿と関係のある代表的な論文のみ、いくつか紹介しておこう。

1. “Husserl’s ethics of renewal: a personalistic approach,” in Miira Tuominen, Sara Heinämaa and Virpi Mäkinen (eds.): *New Perspectives to Aristotelianism and Its Critics*, Leiden, Boston: Brill, 2014, pp.196–212 (in print).
2. “The Animal and the infant: From embodiment and empathy to generativity,” in Sara Heinämaa, Mirja Hartimo and Timo Miettinen (eds.): *Phenomenology and the Transcendental*, London, New York: Routledge, 2014, pp.129–146.
3. “Aging and death: Perspectives in the future”, x in Silvia Stoller (ed.): *Simone de Beauvoir’s Philosophy of Old Age*, Würzburg: Walter de Gruyter, forthcoming March 2014, pp.167–187.
4. “Merleau-Ponty: A Phenomenological philosophy of mind and body”, in Andrew Bailey (ed.): *Philosophy of Mind: The Key Thinkers*, London, New York: Continuum, 2013, pp.59–83.
5. “Transcendental intersubjectivity and normality: Constitution by mortals”, in Dermot Moran and Rasmus Thybo Jensen (eds.): *The Phenomenology of Embodied Subjectivity, Contributions to Phenomenology Series*, Dordrecht: Springer, 2013, pp.83–103.
6. “Beauvoir and Husserl: An unorthodox approach to The Second Sex,” in Shannon Mussett and William Wilkerson (eds.): *Beauvoir Engages the History of Philosophy*, SUNY, 2012, pp.125–151.
7. “Sex, gender and embodiment”, in Dan Zahavi (ed.): *Handbook in Contemporary Phenomenology*, Oxford University Press, 2012, pp.216–242.
8. “Body”, in Sebastian Luft and Søren Overgaard (eds.): *The Routledge Companion to Phenomenology*, Routledge, 2011, pp.222–232.
9. “Personality, anonymity and sexual difference: The temporal formation of the transcendental ego”,

in Helen Fielding, Dorothea Olkowski and Christina Schües (eds.): *Time in Feminist Philosophy*, Bloomington: Indiana University Press, 2011, pp.41–59.

10. “A phenomenology of sexual difference: Types, styles, and persons”, in Charlotte Witt (ed.): *Feminist Metaphysics: Explorations in the Ontology of Sex, Gender and Identity*, Dordrecht: Springer, 2011, pp.131–155.
11. *Birth, Death and the Feminine: Essays in the Philosophy of Embodiment*, co-authored with Robin May Schott, Vigdis Songe-Møller and Sigridur Thorgeirsdottir, Bloomington: Indiana University Press, 2010.
12. “Phenomenological responses to Gestalt-psychology”, in Sara Heinämaa and Martina Reuter (eds.): *Psychology and Philosophy: Inquiries into the Soul from Late Scholasticism to Contemporary Thought*, Dordrecht: Springer, 2009, pp.263–284.
13. “Psychoanalysis of things: Objective meanings or subjective projections?”, in Christine Daigle and Jacob Colomb (eds.): *Beauvoir and Sartre: A Riddle of Influence*, Bloomington: Indiana University Press, 2009, pp.128–142.
14. “Simone de Beauvoir”, in Hans Rainer Sepp and Lester Embree (eds.): *Handbook of Phenomenological Aesthetics*, Dordrecht: Springer, 2008, pp.41–44.
15. “Selfhood, consciousness, and embodiment: A Husserlian approach”, in Sara Heinämaa, Pauliina Remes and Vili Lähteenmäki (eds.): *Consciousness: From Perception to Reflection in the History of Philosophy*, Dordrecht: Springer, 2007, pp.311–328.
16. “Feminism”, in Hubert Dreyfus and Mark Wrathall (eds.): *A Companion to Phenomenology and Existentialism*, Malden, Oxford, Victoria: Blackwell, 2006, pp.500–513.
17. “On Luce Irigaray’s inquiries into intersubjectivity: Between the feminine body and its other”, in Maria Cimitile and Elaine Miller (eds.): *Returning to Irigaray: Feminist Philosophy, Politics, and the Question of Unity*, New York: SUNY, 2006, pp.243–265.
18. “Phenomenology”, in Alan Slobe (ed.): *Encyclopedia of Philosophy and Sex*, Westport, Connecticut, London: Greenwood, 2006, pp.777–784.
19. “Through desire and love’: Simone de Beauvoir on the possibilities of sexual desire”, in Ellen Mortensen (ed.): *Sex, Breath and Force: Sexual Difference in a Post-Feminist Era*, Lanham, Boulder, New York, Toronto, Oxford: Lexington Books, 2006, pp.129–166.
20. “Verwunderung und sexuelle Differenz: Luce Irigarays phänomenologischer Cartesianismus”, trans.

Silvia Stoller, in Linda Fisher, Silvia Stoller and Veronica Vasterling (eds.): *Feminist Phenomenology and Hermeneutics*, Würzburg: Köningshausen & Neumann, 2005, pp.192–207.

21. “The soul-body union and its sexuality: From Descartes to Merleau-Ponty and Beauvoir”, in Lilli Alanen and Charlotte Witt (eds.): *Feminist Reflections on the History of Philosophy*, Dordrecht: Kluwer, 2004, pp.137– 151.
22. “The body as an instrument and the body as an expression”, in Claudia Card (ed.): *Cambridge Companion to Beauvoir*, Cambridge: Cambridge University Press, 2003, pp.66–86.
23. “The living body and its position in metaphysics: Merleau-Ponty’s dialogue with Descartes”, in Dan Zahavi, Sara Heinämaa and Hans Ruin (eds.): *Metaphysics, Facticity, Interpretation: Phenomenology in the Nordic Countries*, Hague: Kluwer, 2003, pp.23–48.
24. “From decisions to passions: Merleau-Ponty’s interpretation of Husserl’s reduction”, in Ted Toadvine and Lester Embree (eds.): *Merleau-Ponty’s Reading of Husserl*, Dordrecht, Boston, London: Kluwer, 2002, pp.127– 146.
25. “Wonder and (sexual) difference: Cartesian radicalism in phenomenological thinking”, in Tuomo Aho and Mikko Yrjönsuuri (eds.): *Norms and Modes of Thinking in Descartes*, Acta Philosophica Fennica, vol. 64, Helsinki, 1999, pp.279–296.
26. “Women - nature, product, style? Rethinking the foundations of feminist philosophy of science”, in Lynn Hankinson Nelson and Jack Nelson (eds.): *Feminism, Science, and the Philosophy of Science*, Dordrecht: Kluwer, 1996, pp.289–308.
27. “On thoughts and emotions: The problem of artificial persons”, in Leila Haaparanta and Sara Heinämaa (eds.): *Cognition, Connectionism and Semiotics*, Acta Philosophica Fennica, vol. 58, 1995, pp.269–286

( 解題 浜渦 辰二 )